

老舎研究会会報 第22号

胡絮青女士 題字

舒済さんの上着

倉橋 幸彦

日本の老舎研究会が成立する二年前の1982年は、今から振り返ると、わたしにとっては一生忘れることができない年である。

というのも、名もなき日本の一学徒が、舒済さんにお会いし、親しくお話までさせていただくという幸運に恵まれた年だからである。

場所はどこかと言うと、奇しくも舒済さんの生地、中国は山東省の済南。

さて、この舒済さんとの初対面の思い出を記すことにしたいのだが、先にその前段をひとくさり。

周知のように、1982年3月、済南で全国的規模のものとしては初めての老舎学術討論会が開催された。日本からも、中山時子先生を団長とする老舎著作愛好者訪中団が組織され、この討論会に参加することになった。このとき、わが師日下恒夫先生も中山先生のお誘いを受け、老舎学術討論会で報告発表をされることになり、不肖の弟子であるわたくしにも「同行しないか」とお声をかけていただいた。

かくして、わたしの初めての中国訪問が実現したのである。因みに、わが師の世代は、特別な友好人士でない限り、中国に行きたくても行けない世代であった。というわけで、わが師も

この時が初めての訪中。この点だけは、今になっても師に引け目を感じなくてよい。

それはともかく、日本を立つまでが、冷や汗が出る思いであった。学術報告を予定されていたわが師のお手伝いで、発表資料作成を仰せつかったのである。とにかくわけもわからずにやるわけだから、作業は遅遅として捗らず、それでも何とかかこうをつけた時には、すでに出発当日の朝が明けていたのであった。そして、その資料をトランクと一緒に持ち大学まで出かけ、予定部数をコピーし、その足で空港に向かったのであった。

しかしこのおかげで、わたしは資料を調査することの大切さを身をもって実感できたわけだから、わが師にはどれほど感謝してもしきれものではない。もっとも、その当時は書誌が何たるかを少しも理解しておらず、ましてその奥深さなどについては想像も及ばなかったのではあるが。

さて、舒済さんである。

学術討論会の当日、日下先生が報告をされる間、わたしはその補助の説明役も兼ねて舒済さんのとなりに坐らせていただくということになった。

ところが、名もなき一学徒は暢気なものである。日下先生の報告を、配布資料を見ながら真剣にメモを取られる舒済さんを尻目には、わたしには舒済さんが着ておられた上着ジャケットのことが妙に気にかかった。仕立ては悪くないのだが、少し古めかしい感じがしたのである。

さすがに、舒済さんもこの私の執拗な視線に

お気づきになったのか、休憩時間にこっそりわたしに耳打ちされた。

実は、舒済さんが着ておいでになったのは、父君が長らく着用していた上着だということであった。

こうして、わたしの「老舎という人は大柄な人」であると勝手な思い込みは是正され、また幾分なりとも老舎のことが身近に感じられるようになった次第である。

この時に舒済さんと一緒に撮ってもらった写真は、今でも色褪せたアルバムに大切に保管してある。

(追記)

老舎研究会は本年設立25周年を迎えたが、これを記念して、研究会で舒済さんを北京からお呼びすることになった。そこで、舒済さんの紹介文を書くつもりが、よくよく考えれば会員諸氏はわたしなんかより舒済さんのことをよくご存知であるはず。そこでやむなく私的な戯言を認めることにした。

この初対面以来今日に亘るまで、わたしは舒済さんには親しくおつきあいいただくと同時に指導も仰ぎ、特に北京遊学中(1994~1995)には、事あるごとに家(現在の老舎記念館)にもお招きいただいた。感謝の念に耐えない。ただし、そんなこともあってか、現在老舎記念館を訪れても何か違和感を感じるというのも偽らざる思いがある。

以下に、蛇足を承知で舒済さんの略歴と編著作リストを付しておくことにする。

〈舒済女士略歴並びに編著略目〉

1933年9月5日老舎の長女として生まれる。

◇3歳ですでにその文筆の才を発揮。

*少女三岁，专会等我不在屋中，在我的稿子上画圈拉杠，且美其名曰“小济会写字”！

(「有了小孩以后」)

1953年~1978年

◇河北北京師範学院、河北師範学院物理学部の講師。

1978年

◇『老舎文集』出版という目的のために、人民文学出版社に副編審として出向。

1980年

◇人民文学出版社での最初のお仕事(校勘)で公になったものは次の二冊と思われる。

『正紅旗下』1980年6月

『鼓書芸人』1980年10月

1980年11月~1988年

◇1980年の11月から『老舎文集』刊行開始。

1. 『老舎文集(全16巻)』

1980年11月-1991年5月

なんと、最終巻刊行までに10年以上の年月が費やされたのである。

なお、同文集の編者は「人民文学出版社編輯部」であり、人民文学出版社の場合、(主編・編者等の)個人名を特記しないという方式を採用しているようである。

◇その間の編著書目(編著者としてその名が実際に明記されているものに限定)は以下の通り。

2. 『老舎選集(全5巻)』四川人民出版社

1982年7月-1986年6月

3. 『老舎散文選』百花文芸出版社

1984年5月

4. 『文牛-老舎生活自述』[回憶與隨想文]

生活・読書・新知三聯書店香港分店

1986年11月 *胡絮青共編

5. 『《老牛破車》新編-老舎創作自述』

生活・読書・新知三聯書店香港分店

1986年11月 *胡絮青共編

6. 『老舎幽默諷刺詩文選』[小図書館叢書]

四川少年儿童出版社 1987年

7. 『老舎』[中国現代作家選集]

三聯書店(香港)有限公司

1988年5月

(台湾版:『老舍』[三十年代中国作家選集] 大台北出版社、1990年2月)

*王揺「序」:老舍先生の作品不僅數量眾多,而且他的膾炙人口的精品大都是長篇,要在本篇幅不多的選集中選出可以代表他多方面成就的作品是很困難的。但正如魯迅先生所說,「借一斑略知全豹」;本書編者舒濟女士不僅與老舍先生父女情深,真正領受過作者品德的感召,而且參預了《老舍全集》的編纂工作,對作者的全部作品進行過深入地探討和研究;經過她的精心編選,應該說,讀者是可以從這本書得到對老舍先生的人格精神和藝術成就的比較準確的了解的,因此我願意把它推薦給愛好文學的大讀者。

1989年7月11日~8月6日

◇老舍研究会の招請で来日。7月15日、老舍研究会第6回年会(中京大学)で講演。同29日、大東文化会館でも講演(「老舍書信和及書信集」)。

1991年

◇『老舍文集』完結を機に、人民文学出版社を退職。

1991年10月~1999年1月

8. 『老舍和朋友們』三聯書店

1991年10月

9. 『老舍書信集』[現代作家書簡叢書]

百花文芸出版社 1992年6月

10. 『老舍幽默詩文集』海南出版社

1992年10月

11. 『老舍散文選集』[百花散文書系]

百花文芸出版社 1992年11月

(同2版 2004年8月)

12. 『老舍小説全集(全11卷)』

長江文芸出版社

1993年11月 *舒乙共編

(同修訂版、2004年8月)

13. 『老舍散文精編』人民文学出版社

1994年1月

14. 『老舍小説經典(全4卷)』[回顧中外文學叢書] 九洲圖書出版社 1995年6月

15. 『老舍』(撮影集) 北京燕山出版社

1996年11月 *舒乙、金宏共編著

*舒济[后记]:1993年秋在国内外朋友的催促下,在日本老舍研究会创始人中山时子的支持下,开始了本书的编辑工作。

16. 『老舍全集(全19卷)』

人民文学出版社、1999年1月

上記の『老舍文集』同様、『老舍全集』もあくまで「人民文学出版社編集部」編であり、舒濟女士は、原稿提供者ならびに協力者としてその名を止めるに過ぎない。

*[(第19卷)编后记]:《老舍全集》编辑工作启动伊始,就得到老舍家属,特别是舒济的支持和帮助,向我们提供了本书的全部文稿,在此,我们表示衷心的感谢! / 参加《老舍全集》编辑工作的有:陈早春、李文兵、罗君策、王海波、张小鼎、张敏、岳洪治、郭娟。 / 李启伦、黄汶、柴志湘、王玉梅等同志也参加了部分编辑工作;胡允桓、陈凯、史佳校勘了全部英文稿;石晓霞编纂了《全集篇目索引》,在此一并致谢!

なお、この『老舍全集』に関する一つのエピソードを綴った拙文を、参考までにここに再録しておく。

*「柴垣先生逝去の翌年、一九九七年のある日のこと、老舍の長女舒濟さんから思いもよらぬ手紙が届く。「現在、老舍全集を編集しているが、どうしても手に入らぬ資料が八十篇ほどある。それらについては柴垣先生がお持ちのはずだから、お借りして送ってほしい。」との要請。 / わたしは、名古屋大学の桜井龍彦氏の協力を得て、柴垣先生のお宅に伺い、そのうち六十三篇の資料を柴垣婦人[★

夫人の誤植]から借り受け、それにわたしが上海図書館でコピーした資料を一篇加え、さっそく舒済さんの元に送った。／こうして、柴垣先生がライフワークと定めた資料収集が、『老舎全集』出版のお役に立ったのである。先生もきっと喜んで下さるに違いない。ただしそのことは『老舎全集』には一行たりとも触れられていない。不可思議としか言いようがない。」(「老舎研究会とわたし」)

17. 『老舎講演集』

生活・読書・新知三聯書店、
1999年1月

1999年

◇老舎記念館館長に就任。

2000年～2004年

◇2000年以後の編著リスト

18. 『老舎文学詞典』

北京十月文芸出版社、2000年2月
*舒済主編

19. 『老舎幽默詩文集』

三聯書店(香港)有限公司、2001年8月
*舒済校勘

20. 『老舎幽默詩文集』

人民文学出版社、2004年1月

21. 『老舎選集』 [中国文庫]

人民文学出版社、2004年3月

4. 藤井栄三郎：老舎の短篇小説のモチーフと模索について

[第2回] 1985年7月20日 名古屋大学

1. 雲野葉子：老舎の現代詩について
2. 石井康一：『茶館』について
— そのテーマと「新しさ」に関する考察 —
3. 日下恒夫：『文博士』について
4. 岡部謙治：『茶館』舞台上演における音声上の二、三の問題

[第3回] 1986年7月19日 名古屋大学

1. 倉橋幸彦：老舎作品中における“犠牲”について
2. 平松圭子：『火葬』と重慶北培における老舎の生活
3. 杉本達夫：「文協」の財政と老舎
4. 藤井栄三郎：老舎のリアリズムとキリスト教
5. 李 玉敬：试论文学欣赏角度谈谈老舎作品中的北京话

[第4回] 1987年7月18日
愛知婦人文化会館

1. 劉 孝春：現代文学中的宗教諸問題
2. 倉橋幸彦：“写家”老舎
3. 飯泉彰裕：香港老舎生活歷程展(一)
4. 平松圭子：香港老舎生活歷程展(二)

[第5回] 1988年7月16日
中京大学八事学舎

1. 杉野元子：『老張的哲学』をめぐる二、三の問題
2. 金森由美子：『駱駝祥子』をめぐる
3. 大塚秀明：老舎初期の作品に見られる語法について

4. 高橋弥守彦：『茶館』の版本について
5. 伊藤敬一：老舎短篇小説の研究について
6. 中山時子：『老舎事典』について

[第6回] 1989年7月15日
中京大学八事学舎

1. 大田加代子：老舎の戯曲にみられる語法上の特徴

老舎研究会年会発表報告記録

[第1回] 1984年3月17日 名古屋大学

1. 齊藤匡史：老舎年譜のいくつかの問題について
2. 倉橋幸彦：『駱駝祥子』評論史略
3. 渡辺安代・高橋由利子：中国の「本色教会」運動と老舎

2. 松村茂樹 : 「小人物自述」に見える老舎の自伝観
3. 杉野元子 : 渡英以前の老舎
4. 石井康一 : 『茶館』成立考
5. 日下恒夫 : 『猫城記』の評価をめぐって
6. 舒 濟 : 从「一家代表」到「茶馆」
- 〔第7回〕 1990年6月23日 中京大学八事学舎
1. 岡本俊裕 : 『茶館』の言葉について
2. 倉橋幸彦 : 「満族作家」老舎の誕生をめぐって
3. 日下恒夫 : 『四世同堂』は本当によみがえったか
4. 今富正巳 : 中山高志先生邦訳『駱駝祥子』の経過について
5. 李 輝 : 谈『从祥子人格结构的变化』
- 〔第8回〕 1991年7月26日 関西大学
1. 孟 丹 : 孟广来先生的老舎研究
2. 松村茂樹 : 老舎の文人観および文人趣味観について
3. 中野耕一 : 老舎の音感 — 擬声詞の形態論的特徴
4. 倉橋幸彦 : 最近の老舎研究あれこれ
5. 尾崎 實 : 老舎のことば遣い
- 〔第9回〕 1992年7月24日 関西大学
1. 谷川 毅 : 自らを北京に埋めた男祥子
2. 杉本達夫 : 老舎の西北旅行
3. 橋本幸枝 : 『駱駝祥子』の言語特色
4. 牛島徳次 : 『駱駝祥子』における“概数”
- 〔第10回〕 1993年7月23日 関西大学
1. 倉橋幸彦 : “玩児命”老舎 — 「王氏論文」をめぐって
2. 布施直子 : ふたたび老舎の足跡を
3. 藤井栄三郎 : 京都老舎を読む会 — 『老舎集外集』を読む中で
4. 柴垣芳太郎 : 私と老舎
- 〔第11回〕 1994年7月26日 関西大学
1. 布施直子 : 『剣北篇』を読んで
2. 渡辺武秀 : 老舎作品の世界 — 笑いの視点から
3. 平松圭子 : 修辞から見た老舎のユーモア表現
4. 林 海音 : 城牆天橋四合院 駱駝祥子滿街跑
- 〔第12回〕 1995年7月28日 関西大学
1. 高橋由利子 : 老舎ともう一人の英国人
2. 牛島徳次 : 『駱駝祥子』の注釈について — 語学的な若干の問題
3. 範 亦豪 : 雑話老舎
- 〔第13回〕 1996年7月26日 関西大学
1. 花城可裕 : 『駱駝祥子』についての試論
2. 杉野元子 : 老舎と蕭乾
3. 藤井栄三郎 : 『大悲寺外』と『歪毛児』 — 老舎におけるキリスト教
4. 王 端 : 从阿部谈起 — 读老舎旧体诗「游日十七首」
- 〔第14回〕 1997年7月25日 早稲田大学
1. 杉本達夫 : 它、牠、他 — 「微神」の中のある代名詞について
2. 渡辺武秀 : 老舎小説の愛
3. 中山時子 : ビデオ「老舎」の鑑賞と説明
4. 牧田英二 : 満洲族の現代作家たち
5. 郝 長海 : 论《四世同堂》的文化批判意识
- 〔第15回〕 1998年7月24日 早稲田大学
1. 弓削俊洋 : 老舎と相声 — 「老舎相声」における「笑い」の技法
2. 布施直子 : 老舎「避暑録話」
3. 武永尚子 : 『四世同堂』における日本人
4. 伊藤敬一 : 老舎文学の原点について
- 〔第16回〕 1999年7月23日 早稲田大学
1. 緒方 昭 : 『四世同堂』にみる弱者への — 瑞宣像を中心に —
2. 渡辺武秀 : 老舎幽默作品中の「悲劇」について
3. 山口 守 : 老舎とアイダ・プルーイット

4. 藤井栄三郎：「祭子路之岳母文」——老舎文学の側面について——

〔第17回〕2000年7月28日 早稲田大学

1. 南雲大悟：丁聡の挿絵からみる老舎小説
2. 大辻富美佳：老舎研究における都市と文学
3. 谷川 毅：老舎最後の声音
4. 李 玉敬：『正紅旗下』の旗人

〔第18回〕2001年7月27日 早稲田大学

1. 大辻富美佳：甘海嵐女士の京味児について
2. 谷口知子：『茶館』における要請表現
3. 倉橋幸彦：『老舎全集』との薄い関わり
4. 杉本達夫：老舎の死をめぐる断想

〔第19回〕2002年7月26日 早稲田大学

1. 稲田直樹：『駱駝祥子』をめぐって
2. 藤井 宏：短篇小説「歪毛児」をめぐって
3. 日下恒夫：アメリカから帰った老舎
4. 孫 鈞政：老舎の京味児语言

〔第20回〕2003年7月25日 関西大学

1. 杉野元子：「我這一輩子」のテレビドラマ化をめぐって

2. 布施直子：国際老舎学術検討会に参加して

3. (座談) 伊藤敬一・藤井栄三郎・平松圭子・布施直子：『中国当代文学史』をめぐって

4. 藤井栄三郎：老舎と私

〔第21回〕2004年7月31日 関西大学

1. 吉田世志子：老舎『猫城記』——早く来すぎた小説

2. 池田智恵：老舎『離婚』と30年代の武俠小説ブームについて

3. 傳 光明：対老舎之死の調査与研究

〔第22回〕2005年8月5日

大阪駅前第4ビル大阪産業大学
梅田サテライト教室

1. 池田智恵：老舎短篇小説作品とイギリス大衆小説——老舎「微神」とアルジャノン・ブラックウッド“The Stranger”

2. 吉田世志子：『駱駝祥子』にみる「活下去（生

き続けること）」の意味

3. 渡辺武秀：老舎「不伝」の世界を読む

4. 杉本達夫：漫談 小著の尾ひれ

〔第23回〕2006年8月1日

大阪駅前第3ビル大阪産業大学
梅田サテライト教室

1. 布施直子：2006年夏、山東——

第四届国際老舎学術討論会

2. 櫻井龍彦：妙峰山廟会に集う人びと—

復活した民間の信仰組織

「香会」について

3. 平松圭子：老舎「末一塊錢」と C. Y. Lee “Mr.

Weng’s Last Forbidden Dollar”

を読む

『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読（4）

小生 常談

〔第10章〕

- ①【全集】繞了个圈儿，又繞回到原街。

（第85頁正1行）

- 【人間】繞了個圈兒，又繞回到原處。

（第112頁正5行）

〔按語〕：「原處」→「原街」は

【人民】に基づく。

- ②【全集】假若他平日交下几个，他想，像他

自己一样的大汉，再多有个虎妞，

他也不怕。（第85頁倒7行）

- 【人間】假若他平日交下幾個——他想

——像他自己一樣的大漢，

再多有個虎妞，他也不怕。

（第113頁正6行）

〔按語〕：標点符号の書きかえは、

【人民】に基づく。

- ③【全集】现在，他似乎看出来，一月只挣那

么些钱,而把所有的苦处都得受过来,连个小水筒也不许冻上,而必得在胸前抱着,自己的胸脯多么宽,仿佛还没有个小筒儿值钱。

(第 86 頁正 5 行)

【人間】現在,他似乎看出來,一月只掙那麼些錢,而把所有的苦處都得受過來,連個小水筒也不許凍上,而必得在胸前抱着,自己的胸脯——多麼寬——仿佛還沒有個小筒兒值錢。

(第 113 頁倒 1 頁)

[按語] : 同②

④【全集】在虎妞找他的第三天上,曹先生同着朋友去看夜场电影,祥子在小茶馆里等着,胸前揣着那像块冰似的小筒。(第 86 頁正 10 行)

【人間】在虎妞找他的第三天上,曹先生同着朋友去看夜場電影,祥子在個小茶館裏等着,胸前揣着那像塊冰涼的小筒。(第 114 頁正 4 行)

[按語] : 「冰涼」→「冰」の訂正は、
【晨光】に基づく。

⑤【全集】天极冷,小茶馆里的门窗都关得严严的,充满了煤气,汗味,与贱臭的烟卷的干烟。绕这么样,窗上还冻着一层冰花。(第 86 頁正 11 行)

【人間】天極冷,小茶館裏的門窗都關得嚴嚴的,充滿了煤氣,汗味,與賤臭的煙捲的幹煙,繞這麼樣,窗上還凍着一層冰花。(第 114 頁正 5 行)

[按語] : 「賤」→「賊」は、【全集】がはじめてである。「;」→「。」の書きかえは、【人民】に基づく。

⑥【全集】认识了自己,也想同情大家。(第 87 頁正 7 行)

【人間】認識了自己,也想同情于大家。(第 115 頁正 7 行)

[按語] : 「于」の削除は、

【人民】に基づく。

⑦【全集】大家正说到热闹中间,门忽然开了,进来一阵冷气。(第 87 頁正 13 行)

【人間】大家正說得熱鬧中間,門忽然開了,進來一陣冷氣。(第 115 頁倒 3 行)

[按語] : 「說得」→「说到」は、
【人民】に基づく。

⑧【全集】小马儿也就是十二三岁,脸上挺瘦,身上可是穿得很圆,鼻子冻得通红,挂着两条白鼻涕,耳朵上戴着一对破耳帽儿。(第 90 頁正 3 行)

【人間】小馬兒也就是十二三歲,臉上挺瘦,身上可是穿得很圓,鼻子凍得通紅,掛着兩條白鼻涕,耳朵上戴一對破耳帽兒。

(第 119 頁倒 5 行)

[按語] : 「鼻涕」→「鼻涕」は、
【人民】に基づく。

⑨【全集】一辆极破的车,车板上的漆已经裂了口,车把上已经磨得露出木纹,一只唏哩里啵啵响的破灯,车棚子的支棍儿用麻绳儿捆着。

(第 91 頁正 8 行)

【人間】一輛極破的車,扶車板上的漆已經裂了口,車把上已經磨得露出木紋,一隻唏哩啵啵響的破燈,車棚子的支棍兒用麻繩兒捆着。

(第 121 頁正 6 行)

[按語] : 「扶車板」→「车板」は、
【人民】に基づく。

⑩【全集】空中浮着些灰沙,……。(第 91 頁倒 7 行)

【人間】空中浮些着灰沙,……。(第 122 頁正 2 行)

[按語] : 「浮些着灰沙」→「浮些着灰沙」の訂正は、【晨光】に基づく。

〈注〉：なお、「(腿)拳了拳」→「(腿)蜷了蜷」等の表記の規範に関する改訂は採らなかった。

[第 11 章]

①【全集】卖糖的小贩急于把应节的货物掏出去,上气不接下气的喊叫,听着怪震心的。(第 94 頁正 9 行)

【人間】賣糖的小販急於把應節的貨物措出去,上氣不接下氣的喊叫,聽着怪鎮心的。(第 124 頁倒 3 行)

[按語] : 「措」→「掏」は、
【人民】に基づく。
「鎮心」→「震心」は、
【晨光】に基づく。

[第 12 章]

①【全集】桥上没人,连岗警也不知躲在哪里去了,……。(第 103 頁正 7 行)

【人間】橋上沒人連崗警也不知躲在哪里去了,……。(第 137 頁倒 5 行)

[按語] : 「,」の挿入は、
【人民】に基づく。

②【全集】难道曹太太已经走了吗?那个姓孙的为什么不拿她们呢?
(第 103 頁倒 11 行)

【人間】難道曹太太已經走了嗎?那個姓孫的為什麼不拿她呢?
(第 138 頁正 3 行)

[按語] : 「她」→「她们」は、
【人民】に基づく。

③【全集】弯着腰走过去,到窗外听了听,……
(第 103 頁倒 6 行)

【人間】彎着腰走過走,到窗外聽了聽,……
(第 138 頁正 7 行)

[按語] : 「走過去」→「走過去」誤植の訂正は、【晨光】に基づく。

④【全集】『祥子,怎么回事呀?』

(第 103 頁倒 3 行)

【人間】“祥子,麼怎回事呀?”

(第 138 頁倒 6 行)

[按語] : 「麼怎」→「怎么」誤植の訂正は、【晨光】に基づく。

⑤【全集】高妈叹了口气。得啦,“我走,少爷还许冻着了呢,赶紧看看去!……”

(第 104 頁倒 4 行)

【人間】高媽嘆了口氣。『得啦,我走,少爺還許凍着了呢,趕緊看看去!……』

(第 140 頁正 2 行)

[按語] : 【全集】の「“」の位置は明らかな誤植。

⑥【全集】破闷葫芦罐在地上扔着,他拾起块瓦片看了看,照旧扔在地上。
(第 105 頁正 3 行)

【人間】破悶葫蘆罐在地上擲着,他拾起塊瓦片看了看,照舊擲在地上。
(第 140 頁正 6 行)

[按語] : 「擲」→「扔」は、
【晨光】に基づく。

⑦【全集】把铺盖扔过去,落在地上,没有什么声响。(第 105 頁正 14 行)

【人間】把鋪蓋擲過去,落在地上,沒有什麼聲響。(第 140 頁倒 1 行)

[按語] : 同⑥

* * * * *

第 21 号「『老舍全集』所収『駱駝祥子』校読(3)」の正誤

[第 8 章] ③、【全集】【人間】の例文における「汽車夫」を「洋車夫」に訂正。

老舎関係文献略目 (12)

倉橋 幸彦 (編)

【2005年〈上半期〉・補】

前号で、平岡清明「志ん生「らくだ」と老舎「駱駝祥子」」を採り上げたが、この文章の種文(?)とも思われるものを見つけたので、補足する意味でここに記しておく。

花田清輝「駱駝祥子」(『恥部の思想』講談社、1965年8月2日、p. 337-345 → 『ザ・花田清輝(下巻)』第三書館、2008年5月1日、p. 542-545)

* 「『らくだ』という落語は、らくだの馬さんというヤクザが手料理で河豚をくって毒にあたり、歯をむきだして死んでるところへ、仲間の判次という男が、ブラリとたずねてきて、馬さんと同じ長屋の住人である屑屋の久六をつかって、大家をおどかし、酒と煮しめとを提供させ、通夜をすところからはじまります。いったい、あの馬さんという死人は、どうして「らくだ」といったような仇名をつけられていたのでしょうか。もしもその「らくだ」が動物の駱駝を意味するなら、馬は馬でも、ただの馬ではなく、駱駝のようなめずらしいケダモノであるところからきてるのでしょうか。文政四年(一八二一)六月、オランダ人の連れてきた駱駝が二頭、大坂〔☆『ザ・花田清輝』:「大阪」〕の浪花新地で見世物になったことがあり、「その形、馬に似て馬にあらず、頭は羊にて、うなじ長く、耳は垂れ、背に肉の峰ありて、鞍のごとし。」といったような当時の記録が残ってるところをみますと、馬さんが、駱駝と呼ばれていたのも、それほど異とするには足りないかもしれません。そういえば、今村信雄の『落語事典』の『らくだ』の項には、「元来、上方

話であったのを、三代目小さんが阪地から東京へ移入して以来、有名な出し物となった。現在、志ん生や可楽は大阪のままでやっている。」とあります。／しかし、まあ、そんなことはどうでもいいのです。わたしは、いま老舎の『駱駝祥子』という有名な小説の主人公である北京の車夫の祥子が駱駝という仇名をつけられるにいたったくだけりをおもいうかべているうちに、ふと、同じ名の持主である馬さんを連想したにすぎません。もともと、祥子は、ヤクザの馬さんとはちがって、非常な働き者であって、爪に火をともしような暮しにたえながら、あたらしい人力車を手に入れ、肩で風をきりながら、意気揚々と稼ぎまくっていました。ところが、ある日、人力車もろとも、軍隊に徴発され、それ以来、兵隊どもの荷物をかついで北京の周辺の間々をあるきまわり、前途になんの希望ももちえない哀れな境遇におちいってしまいました。そんな祥子が、ある晩、かれの寝てるところのすぐ近くで、駱駝の鳴くのをきいて、突然、脱走を決意します。駱駝は山あるきは苦手ですから、そいつがいる以上、いまいる場所が平地の近くだということを悟ったからです。かれは平地へむかって——その平地の中心にある北京へむかって一目散に逃亡しようとはしますが——しかし、そのさい、無一物のかれは、つい、ふらふらと、駱駝の手綱をひろいあげてしまいます。／しかも祥子のひろいあげた手綱には、そのうしろに三頭の駱駝がつなぎあわされていまして、先頭の一頭が立ちあがってあるきだすとともに、他の二頭もまた、つぎつぎに立ちあがって、そのあとにつぎました。したがって、新米の泥棒であるにもかかわらず——いや、新米の泥棒であるがゆえに、祥子は、前後の見境もなく、コッソリぬすみだすこととうていできないような、ひどくやっかいな贓品に関係をもってしまったわけであります。心はやたけにはやり、人力車夫である以上、足に

は自信があるのですが、うしろに三頭の双峰駱駝をひっぱってるのでは、雲を霞と逃げうせるわけにもいきません。かれは、駱駝と歩調をあわせながら、よそ目には、あくまで気楽そうに、ノソリ、ノソリとあるいていかなければならないのです。むろん、理性は、たえずかれにむかって、そんなずう体の大きなお荷物をほうりだしてしまえ！命あつての物種ではないか！と命令するのですが——しかし、そう命令されればされるほど、かれの手は、ますますきつく、駱駝の鼻づらにゆわいつけられた一条の綱を、しっかりと握りしめるのです。わたしには、その祥子の心のうごきが、よくわかるような気がします。なぜなら、わたしもまた、わたしの一生をふりかえてみますと、一条の綱を手ばなすことができなかつたばかりに、背後にゾロゾロと三頭の駱駝を引っぱりながら、心ならずもゆうゆうと逃亡しなければならなかつた、一個の祥子にほかならなかつたとおもわれてならないからです。／朝がきて、つくづくその三頭の駱駝をながめてみますと、ちょうど毛の抜ける時期にあたっていましたので、赤茶けた灰いろの皮膚をさらけだし、あちらに—かたまり、こちらに—かたまりといったふうに、抜け残つたきたない毛が、からだにコビリついているところは、どうしても獣のなかの大きな乞食といったような感じでした。しかし、とにかく、祥子は、まんまと軍隊から逃亡し、その上、三頭の駱駝を獲得することに成功したのです。そこで、その後、かれは、駱駝祥子と呼ばれるようになったのであります。老舎は、その小説の冒頭で、わたしの紹介したいのは、祥子についてであつて、駱駝についてではないといっています。だが、どうやらわたしは、祥子よりも駱駝に興味をいだいているらしく、駱駝を手ばなしたあとの祥子の一生の浮沈については、かれにまつわりつく虎娘といったような興味津津たる人物が登場するにもかかわらず、それほど心をひか

れません。わたしには、祥子の生涯は、かれの駱駝を引き連れた暗夜行路の部分に集中的に表現されてるような気がしてならないのです。戦々競々としながら、しかも泰然自若として、巨大な毛の抜けた駱駝とともに、ノソリ、ノソリとあるいていく光景は、滑稽であればあるほど悲壮であり、まさに人類そのものの運命を暗示しているようにみえるではありませんか。／祥子も駱駝に乗ることを考えないわけではありませんでした。乗っていたなら、いくらかかれからも、不敵な感じがうかがわれたかもしれません。第一、疲労困憊しないですんだにちがいないのです。だが、乗るためには、いちおう、駱駝を坐らせなければなりません、追跡をおそれてるかれには、そんな余裕もなく、ひたすら前進しつづけないわけにはいかなかつたのです。そればかりではありません。高いところに乗っていたのでは、足もとが見えないので、万一、駱駝がぬかるみへ踏みこんで倒れたりすれば、自分もまた、共倒れにならなければなりません。そんな目に会うくらいなら、このまま、あるきつづけたほうがいとかれは思案していたのであります。／首は鶴、背中は亀に似たりけり、千歳らくだ、万歳らくだ。」

【2005年〈下半年〉】

『老舎研究会会報』第19号（8月5日）

◆倉橋幸彦「晨光出版会社と老舎」p.1-3／小生常談『老舎全集』所収「駱駝祥子」校註(1) p.3-6／倉橋幸彦編「老舎関係文献略目(8)」p.6-12：【2002年下半期・補】【2003年上半年期】【2003年下半年期】／「事務局便り」p.12

曾 広燦『老舎年譜・著作年表 補編』

[老舎事典別冊]

大修館書店、9月1日、12頁

◆年譜・著作年表・関連重要事項 p.1-9／正

編 正誤表 p.10/曾広燦：老舎年表補編について p.11/中山時子：『老舎事典』再版によせて p.12

*「老舎年表補編について」：「年表編纂の一貫性を保ち、かつ再販の便宜を考^マえて、補編もその形式は変更しない、欠けた部分を補うという原則にのっとって、新たな資料はそれぞれ項目を立て、時間順に配列するのは元の年表（正編）と同じである。今回は遺漏部分のみを補うものとし、正編に記載された資料は補編に収めない。補編は正編とは別に、独立した形で印刷するので、読者は正編と補編を互いに参照して欲しい。」

*「『老舎事典』再版によせて」：「戦後、湯島聖堂における斯文会主催の中国語講習会に、毎日曜、中国人の中国語による中国現代文学作品の講読が開講された。初代の講師は来日間もない北京人、水世婦女士で、素材は老舎の短篇『柳家大院』であった。斯文会の一教室に漲る女士の音吐朗朗・自由闊達な名講義は多くの碩学・学徒を魅了した。“老舎を読む会”の発祥は実はここにあったのである。以来、講師は変わり、会場は転々としたが、毎日曜午前午後の講習会は中国語を学び、なつかしい人々の心のふるさとともなり、画期的勉強会として今日まで延々55年の歳月を重ねて来ている。／その間“老舎を読む会”は、何回かの“老舎の足跡を訪ねる旅”“祥子の旅”“北京胡同の見学”“四合院の研究”等の中国大陸の研修旅行を行った。また、中国の老舎研究会の大会に参加し中国及び諸外国の老舎研究家、老舎遺族と交流した。これらはすべて『老舎事典』の温床となり、多くの方々の協力を得て、本事典の出版に至ったのである。／昨春、北京での10日間の研修を終え北京空港への帰路、南開大学の曾広燦先生の“老舎年譜・著作年表”を補筆されたいという強い要望もあり、私は帰国後、大修館書店の編

集部長岡田耕二氏に再版を依頼して快諾をいただいた。／本補編は、お茶の水女子大学博士課程院生の大辻富実佳さんの翻訳と同大学院修士修了の仁志川明子さんの校正による。」

興水優「第16回倉石賞授賞式興水優老師の挨拶 (2005年10月15日)」

『日中学院報』368(11月1日) p.1-4

*「ところで、私が中国語と付き合っ^マて、何らかのきっかけを作ってくれた書物が三つほどあります。これは1997年に東方書店の『東方』という雑誌が、200号記念に100人に、自分の読書歴から特に印象に残る三冊を挙げて書いてくれということで、私も声をかけられましたので三つ挙げました。／一つは、私が大学に入る直前くらいに読んだもので、中国語をやろうとはしていたけれどまだ一言も知らない時期ですが、その頃に老舎の《四世同堂》の翻訳が出ました。これは1952年に翻訳が出ているんですが、揃った形では1954年、ちょうど私が大学に入る直前くらいに出たんです。その前の1952年のものも高校3年生くらいの時に見ていたような気がします。／私はまったくノンポリで中国語を選びましたから、何も知識がなくてその小説を読み、この小説には別に日本軍の残虐な行為というのは出ないんですが、日本の占領下の北京で中国人がどのような生活を強いられていたかということが非常に克明に書かれています。これを読むことによって、自分自身も心の痛みを感じるとともに、中国語を勉強していく上での一つの姿勢というものが出来たような気がいたしました」(p.2)。

関中研「養花」

『中国語中級テキスト 心に残る中国語』(金星堂、10月20日)第2課・第3課 p.13-24

◇「関中研」とは、姓は関、名は中研。そんな

はずはなく、実は関西大学中国語教材研究会の略称。

80年代中国で編まれた中国語教材にはよく「养花」が採られていた記憶がある、21世紀に入って、日本の中国語教科書にこの作品が復活するとは、少々複雑な感あり。

杉本達夫「随想：作品の力と寿命のこと —

『屈原』『四世同堂』『寒夜』にふれて」

『郭沫若研究会報』（日本郭沫若研究会事務局）第7号（10月31日）

p. 3-8

* 「『四世同堂』は、日本占領下の北平を舞台にした老舎畢生の大作であり、抗戦期文学の代表作のひとつに数えてよかろう。八〇年台半ばにテレビ連続ドラマ化されて、全土の人気をさらった。全国で、珍しくチャンネル争いのない番組だったそうだ。人気は『姿三四郎』を上回ったのかもしれない。『四世同堂』は長い長い小説である。簡単には読破できない。だから、読んだような顔をしながら読んでおらず、テレビドラマではじめて筋立てを知ったという知識人が多いらしい。ドラマは小説とは別物なのだけれど、題名を知っていても読めなかったことには、もうひとつ大きな理由がある。七九年十月まで、新中国では出版されなかったからである。第一部と第二部は戦後の上海で出版された。第三部はアメリカ滞在中に書き上げたのだが、発表は建国後の雑誌に途中まで掲載されただけで途絶えた。末尾一三章は原稿の行方も分からない。一三章分の筋立てが分かるのは、英語による要約版が残っているからである。まるまる三〇年も寝かされた後、開放政策とともにようやく光を浴びたことになる。政治の枠が緩んで以来、『四世同堂』に限らず、老舎の民国時代の作品は、つぎつぎと出版され、映画化され、テレビドラマ化されている。／『四世同

堂』にはおびただしい人物が登場する。日本の占領下で、ひとびとはひもじさに耐え、息苦しさに耐え、理不尽に耐えながら、あるいは助け合い、あるいはいがみ合いながら生きる。ある者はおとなしく生き、ある者は抵抗に踏み出し、ある者は勇んで日本に協力する。北平という歴史と文化の街の、占領下という特異な状況下の人々の思考と行動を通して、老舎は中国とは何か、中国文化とは何かを探り、危難の中でこそ明らかになる精神の気高さにそれを見出した。占領下の北平の様相を老舎に伝えたのは、三児を伴って北平からやって来た胡絮青夫人である。夫人は北平で女学校の教員をして一家を支えていた。夫人が伝える北平の様相には、当然ながら伝聞が相当に混じっている。老舎はその話を紡いで、雄大壮麗な物語を織り上げたのである。だが、老舎は北平の土地勘はあるが、占領下の体験はない。想像力を働かせるしかない。それが理由のひとつになるだろうか、物語の展開に、どこか不自然な印象がついてまわるのである。老舎は「日本と戦え、日本を倒せ」と叫び続けた作家であるが、抵抗のあり様も漢奸たちの姿も、作り物じみているようにわたしには感じられる。人物の造形も細部の構築も、『駱駝祥子』に比べて一段落ちる。テーマが先走っているのだと思う。なお、老舎は抵抗を描くに当たって、抵抗する人物や組織に党派色をもたせないようにしている。国共いずれかに傾くことを避けている。老舎は意図的にそうしているのであって、党派的对立を拒否し、葛藤のない社会を希求する旨を無言で表明しているのだと、わたしは考えている。／物語の終盤になって、英語を話す日本の老婦人が登場する。日本の良心を代弁するような夫人を設定したのは、ひょっとして、ニューヨークで石垣綾子と知り合った痕跡なのかもしれない。また、その老婦人が同居する日本人家庭の若妻が、夫が戦死したあと慰安婦にされることになっているが、これなど日本の戦

死者遺族への扱いとして信じがたい。老舎がこういう話を挟んだのは、三八年夏に文協機関誌『抗戦文藝』に載った通信を利用したのだと思われる。「最近ある日本兵がナイフで顔をめちやめちやにしたあと、のどを掻き切って死んだ。時を同じくして、慰安所のひとりの慰安婦が首を吊って死んだ。その兵士の妻であって、日本から慰安婦として送られてきて、ここで顔を合わせ」云々という通信である〔☆鮑雨「揚州的日兵在自殺」『抗戦文藝』一卷九期（三八年六月一八日）に掲載〕。通信とはいえ、内容はいかにも図式に合わせた作り物くさい。慰安所とか慰安婦とか、日本軍のイメージが刷り込み的に広がっていたことが察せられるが、少なくとも、出征軍人の妻を慰安婦に送るなど、日本ではありえない話だとわたしは思う。／『四世同堂』は抗戦文学の代表作といってよい。日本軍との激しい戦闘が続く時期、あるいは苦闘の記憶がまだ生々しい時期、占領下の北平の物語は、民族の尊厳をかけた歩みとして、ひときわ人々の胸に響いたと思われる。八〇年代のテレビドラマは、政治の縛りが解けたあとのある種のゆとりをもって、あるいは文革期と重ね合わせて、ひとびとにきのうの自分を思い起こさせただろう。その占領とか戦闘が遠い記憶となったとき、物語は同様な感動を呼びうるだろうか。世代の溝より大きな溝ができ、空気の壁ができていたのではないか。／ここにあげた三作品を、わたしはいずれも一八歳の時に翻訳で読んだ。河出書房から出ていた現代中国文学全集全十五巻によってである。それぞれに感動した。当時の中国は竹のカーテンの向こう側にあり、カーテン越しの乱反射もあって、清く正しい輝きを感じさせていた。三作ともに建国以前の作品であるが、わたしの感動は建国後のカーテン越しの中国に結びついていた。あれから五十年、わたしはもう耕作の役にも立たず、処分を待つばかりの駄馬である。今年は抗日戦争勝利六十周年を

記念する年であり、反日運動が高まった年でもある。中国は戦勝国であるが、抗日戦は国共の争いを内蔵しており、ことは単純ではない。戦争当時にどんな作品が書かれていたのか、翻訳で読んだ時期の懐かしさも含めて、あらぬことを書き綴ってみた。」

池田智恵「心の中のもうひとつの世界——老舎「微神」とアルジャン・ブラックウッド “The Stranger”」

『中国文学研究』（早稲田大学中国文学学会）第31期（12月31日）p.97-114

◆1 はじめに—老舎による翻訳作品—／2 老舎の短編小説との関係／3 老舎「微神」及びアルジャン・ブラックウッド “The Stranger” の概要／4 「幻想」をめぐる／5 “inner world” と「内心的世界」／6 結語にかえて

*「本稿は2005年8月5日大阪産業大学〔☆梅田キャンパス〕で行われた「老舎研究会」年會での発表に基づいたものである。」（p.111）

■因みに、同論文所載の『中国文学研究』第31期は、杉本達夫先生の退職記念号。杉本先生の「略年譜・著作目録」が付されている。

【2006年】

渡辺武秀「老舎『残霧』試論」

『八戸工業大学紀要』（八戸工業大学図書委員会）第25巻（2月28日）
p.169-183

◆「また、この『残夢』に洗局長に対する強烈な諷刺があるにもかかわらず、なぜ、国民党の膝元である重慶で、上演することができたのかという疑問もある。／この点については、従来、国民党政府統治下の重慶の言論統制は非常に厳しかったというふうに言われているけれど、

少なくとも、この劇が上演された時期には、「非常に厳しかった」ということは、否定されるべきではないか、としか言いようがない。」
(p. 181)

杉本達夫『句集上海 随想大陸の追憶』

同学社、3月21日、文庫版163頁、
本体600円

*「雪のはなし」；「[☆1981年] その日、北京は朝から雪が降りしきっていた。わたしたちは自動車で出かけたのであったが、バス路線を外れた道に入ると、そこには人通りもなく、自動車も走らず、路面はただ白い雪に覆われていた。両側の民家の屋根にも塀の上にも、雪はすでに厚く積もっている。降る雪が音という音を吸い込んで、たださえ静かな通りがいよいよ静寂に包まれ、雪を踏むタイヤの軋みだけが、物の動きを示しているように思われた。舞い落ちる雪を見ながら、わたしはふと老舎の小説『駱駝祥子』[☆第11章]を思い出していた。／旧暦の年の暮れ、かまど祭りの日の夕景に、人力車夫の祥子が雪降るなかを、お抱え主の曹先生を乗せて走る場面である。降り落ちる白い雪が、自動車のヘッドライトに照らされて金砂のごとくに光る。雪を乗せた建物が、街頭の光の中で赤い壁や柱と調和しながら、古都の荘厳さを際立たせている。松の老樹に雪が吸い込まれてゆく……。そうした光景は、実際はごく短く描写されているにすぎないのに、わたしの記憶の中には、全書中のことのほか美しい光景として刻み込まれている。車夫祥子はそうした光景に見とれるゆとりがない。靴底に雪が貼り付き、足取りが思うにまかせない。小説には書かれていないが、このときの祥子の足は、冷たさを通りこして痛く、痛さを通りこして無感覚に痺れていたはずである。／美術学院の各科を見学して、版画科にやってきた。一部屋に学生たちの作品が展示され、作者たる学生たちもその場に

いて、互いの作品を眺めていた。たしか小説の挿絵の制作を課題として、各自が工夫をこらしたのだと聞いた。見てゆくうちに、わたしは黒一色で刷られた一連の版画に引きつけられた。説明書きはなかったが、それは明らかに『駱駝祥子』の場面を彫っていた。単になじみの場面だというだけではない。黒と白の対比だけの構図が、いかにも巧みで力強かった。しろうと目にも優れた作品だと思われた。わたしはそれらを見ながら、ついつい、これは第何章、これは第何章と口に出した。問われるままに、自分はこの小説を訳したと話したので、がぜん株が上がったらしかった、作者李榮生氏(だったと思う)が、わざわざ別に一組刷って、みやげにくれたのである。作品中の一点は、やがてある文学研究誌に掲載されていた。外でも高い評価を得たのであろう。／その日は北京としては珍しい大雪だった。帰途はいっそう厚く積もっていた。北京に雪降る光景を堪能したばかりか、『駱駝祥子』のための版画を贈られたことで、わたしにはまことに記念すべき一日となった。」

(p. 101-104)

*「青島逍遙 二〇〇〇年秋」；「青島にはかつて山東大学があって、幾人もの文学者が集まっていた。わたしはまず老舎の旧居を訪ねた。／老舎の旧居は黄巣路という通りの端近くにある。老舎旧居であることを記したプレートが二枚、塀にはめ込んであり、間の入口を入ると、荒れ果てた庭と二階建てのアパートがある。老舎は一階に住んでいた。代表作『駱駝祥子』はここで書かれた。建物はいかにも老朽でございという風情で、いまも住人がいるのだが、風雨に耐えられるのか心配になった。建物の入口には、若い婦人がひとり、通路をふさぐようにじっと座っていた。庭は草が生えるにまかせているらしく、ごみも目立った。雑草の片隅にコスモスがかすかに揺れ、青く小さい唐辛子が、まっすぐ天をさしていた。／老舎の旧居だという

ので、訪ねて来る人が多いに違いない。わたしのように。縁もゆかりもない今の住人にとって、それは甚だ迷惑であるだろう。ただ庭に入るだけにしても。北京には老舎の生家があり、いまは無縁の人が住んでいる。市の文物でもなく、プレートもないが、やはり訪れる人がいる。わたしはたった一度、団体で見学した際に屋敷内に入った。それ以前に場所は知っていたし、その前の路地（『四世同堂』の舞台になっている路地）を何度もうろついたらけれど、生家の門に入ることは控えていた。いつか学生が訪れたときには、入っていかと訊くと、「可以、可以」とにこにこ入れてくれたそうだが。」（p.135-137）

■なお、同書の p.143に、「1980年当時王府井にあった吉祥劇場における杉本先生と老舎夫人胡絮青女史との歓談風景を写した貴重な写真」が掲載されている。それにしても杉本先生の御髪の豊かなこと、現在からは……。ところで先生の着ておられる服はもしやして人民服でしょうか。（杉本先生はその昔、若き頃の毛沢東にそっくりと言われられたそうですが、この写真をごらんになれば、確かに納得できます。）

緒方 昭「老舎文学にみる芸人の形象——苦難からの翻身——」

『國學院雑誌』第107巻第6号

（6月15日） p.48-60

◆はじめに／一、短篇小説『兔』二、長篇小説『四世同堂』／三、長篇小説『鼓書芸人』／四、話劇『方珍珠』／五、話劇『龍鬚溝』／おわりに

森本まみ子／安達 幸・刘榮訳

『跟文豪一起吃北京飯吧——用“吃的東西”來追尋老舎小説——』

溪艸舎、6月20日、73頁

◆森本まみ子『北京ごはんを文豪といかが——食でたどる老舎小説——』（2003年6月30日、溪艸舎、157頁）の中国語版。

『老舎研究会会報』第20号（8月5日）

◆杉本達夫「会報が20号に達するときに」p.1-2／森本まみ子『老舎研究会』第20号発行を記念して」p.2-3／『老舎研究会会報』総目次（第1号～19号）p.3-7／関 紀新「老舎与北京」p.8-13／杉本達夫「聊城の老舎国際シンポジウム報告」p.13／杉本達夫「老舎消息」p.14／小生談話「『老舎全集』所収「駱駝祥子」校読(1)」p.14-16／倉橋幸彦編「老舎関係文献略目(10)」〔★実は(9)が正しいが、これ以降一つ回数番号がずれてしまうことをおことわりしておく〕p.16-19：【2000年・補正】【2001年〈下半期〉・補】【2002年〈上半期〉・補】【2003年〈上半期〉・補】【2003年〈下半期〉続】／辛彦「“補白”老舎」p.19-20／「事務局便り」p.20

倉橋幸彦編『老舎研究書目(I)』（『老舎研究会会報』特刊2）老舎研究会
（9月1日）33頁

◆目次を兼ねた凡例1頁／I.年譜・年表

p.1-7／補I（単行本一部収録）p.8-11

／II.伝記・評伝p.12-23；1.一般書 2.

画冊 3.写真集 4.自述／補II（単行本一部

収録）p.24-26／III.伝記資料p.27-33

*「目次を兼ねた凡例」：「これは、1977年以降、2006年1月を上限とする、中国（香港・台湾を一部含む）で出版された老舎研究書のうち、伝記に関わる老舎研究書目である。」

老舎著／范亦毫・李玉敬・稲田直樹・清水信夫

注釈『正紅旗下 中国語日本語注釈』

人民文学出版社（2006年12月）262頁

◆ 図版4頁；老舍・作品手迹・小杨家胡同，老舍出生的院落・八旗／（監修）中山時子「《正紅旗下》中国語日本語注釈によせて」2頁／清水信夫「前書き」2頁 || 正紅旗下 中日文対照注釈1(2) - 258 || 舒濟「后記」259 - 262

* 「前書き」：「1996年ごろから東京で御茶の水女子大学名誉教授の中山時子先生が主催される「老舍を読む会」に参加し老舍の作品を読み始めました。この会は戦後50年以上も続いている老舍の作品を中国語で読み理解しようという会で、これまで多くの中国語でも北京語を母語とされる中国人の先生が講義をされてきたと聞いております。私が初めて参加したときの先生は北京語言大学の李玉敬先生でした。／この会で99年9月から「正紅旗下」を教材にして李玉敬先生が講義を開始されました。この時の李先生の講義録を前半を清水が、後半は稲田直樹さんが筆記しこの注釈の基礎としました。また2002年の春から2004年にかけて私はたまたま天津市にて生活することになりましたので東京の「老舍を読む会」でも特別講義をされた南開大学の範亦豪先生のご自宅に毎週一回お邪魔し範先生から「正紅旗下」の講義を受けました。この時にも範先生から教えていただいたことをノートにとっておきました。／その後中山先生、稲田さんと相談してこのお二人の先生の講義録を合体し書物の形にして老舍の作品を愛し研究される方のためにいささかでも参考になるものを残してはいかがかという話になり、私と稲田さんと一緒に整理することになりました。範先生には原稿の段階から何回も吟味され、加筆修正をしていただきました。私の方でも出版されている北京語関係の辞書や書物を使い調べ必要と思われる所には追記をしました。／今回このような書物として出版できることになりましたのは、老舍のご令嬢の舒濟さんのご理解と人民文学出版社の王海波さんのお力添えがあってこそ実現したものであり

お二人には心から感謝を申し上げます。」

* 「后記」：「東京日本老舍读书会已成立五十多年了。读书会中的日本朋友利用每个星期天，在中文老师辅导讲解下，仔细的逐字逐句的去读老舍先生的文学作品。1989年我应邀去参加日本老舍研究会的学术年会时，也参加了读书会的一次活动，他们当时正在《四世同堂》。他们这种坚持不懈的精神，认真读书的态度，对老舍先生文学作品的热爱，使我很感动。／五年前，北京语言大学的李玉敬老师，在她回京休假时来找我，要我解答她在辅导日本朋友读《正紅旗下》中解释不了的问题。我怕遗忘，让她把问题写在一个小记事本上，她写下了五个问题：“姑母抽的兰花几烟”、“在财神庙借了元宝”、“麦芽龙灯”、“真金的扁方”、“参加‘没白没票’的抓彩”，我一看也解释不了。我只好对她说，我需要去请教老年人了。／2000年3月的一天，我去看望母亲，向她提出了这几个问题。她那时已年过九十，可思惟与记忆都挺好。她对这几个问题，都做了很清楚的解答。她一边说，我一边记。她说的很仔细，还怕我不明白，有的地方还画图给我看。她说“兰花几烟”，这是当时京城不少妇女，尤其是旗人老太太爱抽的一种烟丝，是用兰花熏制的。用长烟杆的烟袋锅子抽，抽起来，有淡淡的兰花清香，烟劲不太大。我问她抽过吗？她说她不会抽。可惜她一时想不起来这家烟铺的字号了，还说全北京只有前门外大栅栏内路南的一家烟铺才能买到这种烟丝。她告诉我什么是“麦芽龙灯”，她小的时候曾看过。她说在阜城门内大街路北，一家五间门面的干果铺，每年用稻草扎制一对约四尺长的龙，在稻草上养出麦子嫩绿的麦芽。正月十五灯节的夜晚点燃在龙身上插着的许多红烛，挂在铺子门前，吸引众多逛街灯的市民驻足欣赏。她说北京城只此一家做这种灯。这五个问题由母亲解答后，我都传达给了李玉敬老师。／如今《正紅旗下》所放映的时代与社会，与我们已相隔百年了。那时的北京社会生活早已逝去，尽管那是有的东西还一直延续至今，可更多的东

西已不存在,一些相关的词语也不再流行。今天的读者能看明白小说里的故事,看清书中的人物,懂得小说的含义。可是正像我似的,虽已年过七十,对书中所写的一些民俗或物件或玩物,没见过、没用过、甚至还沒听说过,以往也沒留心打听过,因此像“兰花儿烟”这类东西,这些词,就需要给以解释了。对《正红旗下》这部小说做些注释是绝对必要的。/五年前,日本老舍读书会的朋友,在李玉敬老师的辅导下,对《正红旗下》深读、精读、对字、词、句能念、能懂,实在不易!五年后,2005年的春天,由清水信夫先生给了我一本《正红旗下》的注释本书稿,让我提意见。我看到注释本书稿的作者是天津南开大学范亦豪教授、北京语言大学李玉敬老师、日本汉学家稻田直树先生与清水信夫先生四人。书稿中注释条目近两千条。仅小说第一章就列出了三百多条,近一万个汉字。可见工作量之大,费时之久了! /书稿中所列出的条目,除了那些清末时期的词句外,还有许多是现在中国人与北京人仍在使用中的字、词、句,这些条目对日本朋友来说也需要注释。例如“脑门儿”、“下贱”、“腰花”、“被窝”、“一步一个脚印”、“一点辙也没有”……书稿中的每条均先标出普通话或北京话正确读音的音标、字在词中的轻重读音或儿化音;然后是中文的解释,最后是日文译文。这样的一本注释书,的确是日本读者看《正红旗下》的好工具书,用它可“无师自通”了! /在这本注释定稿过程中,日本老舍读书会会长中山时子教授几次写信给我,他们希望这本书能由中国大陆的出版社出版,还要求将《正红旗下》的全文收入在内,便于阅读。由于我是《正红旗下》著作权的家属代表,已与人民文学出版社签订了十年的出版合同,因此能在人民文学出版社出版这种版本是最合适的。我向人民文学出版社现代文学编辑部主任王海波女士提出,希望出版社再出版这样一本有用的、为中日文化交流做出贡献的书。在出版社的大力支持下,同意为日本老舍读书会专门出版《正红旗下》中日文对照的注释本。

考虑到中国国内对这样的书需求极少,因此不在中国国内发行此书。」

■人民文学出版社出版(定価42.00元)とはいうものの、「不在中国国内发行」。つまり日本限定販売というわけですか。これで副題の「中国語日本語注釈」という表記にも納得がいきました。なお、《正红旗下》の注釈については、すでに恒紹栄「老舍〈正红旗下〉词语简释(上)(下)」(『中国語』第270・271号、1982年7月・8月)があるということは言及しておかねばならない。

会員消息

醒 眼

老舍研究会会員の昨年と今年に入って出版された著作を二点紹介しておきます。

まず、伊藤敬一先生の半世紀にも亘る研究成果の結晶が凝縮された一冊です。書名は、老舍の創作経験集『老牛破車』から採られていることは言うまでもないでしょう。

◎『「老牛破車」のうた — おおらかに、しなやかに日中友好を 伊藤敬一論文散文撰集』(光陽出版社、2007年12月20日、A5版479頁、2500円+税、カバー)

◆口絵8頁/日中中国友好協会:刊行にあたって1-2/目次3-7/「老牛破車」のうた10||はじめに;私と日中関係断章 — 平和と友好を願い大らかにでしなやかに前進したい! / I 散文・書評; (1) (散文) 私に中国文学研究 (2) (散文) 漢語初学時期断片 (3) (書評) 安井三吉著『盧溝橋事件』、肥沼茂著『盧溝橋事件、嘘と真実』 (4) 新歳時記(春の巻)「ある清明節の追憶」 (5) 新歳時

記(夏の巻)「敗戦前後のあれこれ」(6)新歳時記(秋の巻)「わが幻の農村の秋」(7)新歳時記(冬の巻)「忘れられぬ冬の『食』の醍醐味」／Ⅱ 私の研究論文；(1)『文芸講話』の世界(2)老舎文学の世界(3)老舎の小説と戯曲— 話劇を中心に(4)老舎の『微神』について— 老舎の描く女性群像の原型(5)「中国文学あれこれ」六九— 金仁順の短篇小説『渚のアデリーヌ』とその映画化(6)中国語の論理と接続関係— 主述語法序説(7)日本人と日本文化のルーツに関わる徐福と徐福集団の謎(付録)中文「老舎的文学世界」・中文「关于老舎的『微神』」／Ⅲ 日中関係の現状と展望／Ⅳ 伊藤敬一の各種略歴及び著作一覧 || あとがき 477—479

*「私の中国文学研究；— 私の研究テーマ」：「私の研究テーマである老舎という作家は、悪く言えば、いわば前近代的な「講釈師」か「かけ合いまんざい」のような作風をもった物語文学的大衆作家で、その饒舌、誇張、過度の諧謔などがしばしば指摘され、作品は山ほどあるのだが、日本でも中国でも、以前はあまり高く評価されなかった作家である。／そのころ私は東京都立大学にいたが、竹内好・岡崎俊夫両先生の編で『現代中国の作家たち』(和光社、一九五四)という本を出すことになり、私はこの老舎を分担することになった。またそれが機縁となって、その後も老舎の「断魂の槍」(青木文庫『老舎作品集』一九五五)とか、「離婚」(平凡社『中国現代文学全集』第六巻、一九六二)という縁起でもない題名の作品を翻訳する機会にもめぐまれてしまった。／実は当時、私自身の興味は、老舎などにはなく、もっぱら魯迅とか茅盾とか丁玲といった革命文学の主流の方に向かっていたので、文壇の傍流と目されているあまり好きでもないユーモ

ア作家老舎をやることになって、内心面白くなかった。しかしとにかく分担し、引き受けたからには、やらざるを得ないので、膨大な作品を読んで何とか論文を書き、また翻訳にも精を出した。／ところがふしぎなことに、やっているうちにだんだん面白くなってきたのである。全く期待していなかっただけに、ちょっとした発見が意外に面白く感じられ、しだいに深入りしていく。それに自分のあまり好きではなかったはずの文体が、翻訳してみると意外に自分の文体とよく合うのである。そしてそのことで私は、自分がこれまで気づけなかったというより、むしろ自分が気に入らなくて無意識で抑圧していた自分の中のある本質的なものを否認なしに自己認識させられたのである。／老舎という作家は、表面的には、日本でいうと江戸後期の戯作者のような趣きをもった作家で、その饒舌と諧謔の裏に、恐ろしく醒めたりアリズムの目や、中国の貧しい庶民の悲しみがかくされていることがしだいにわかってきた。饒舌の中の寡黙さというか、ユーモラスな哄笑の裏側に、きわめて内向的な暗い悲しみや怒り、鋭い諷刺がひそんでいて、これはどうも大衆的民間形式をふまえながら負の形で自己表現をしている相当したたかな作家なのではないかという認識をもちはじめた。そしてそんな文体が、どういうわけか、私には思ったよりうまく訳せるのである。やはりどこかで老舎の作品に自分の波長と合っているところがあると思わざるを得なかった。／ところが一九六六年八月、あの不幸な「文革」がはじまって、老舎は造反派と紅衛兵の無惨な迫害を受け、非業の死を遂げたのである。このニュースは私にとって衝撃的であった。そして私の老舎研究を本格化する動機ともなった。何としても納得できぬ「文革」時代の不当に低い老舎に対する評価をひっくり

返し、老舎文学に再評価の新しい光を当てずにおくものかという気持ちが、私の研究の原動力となって今日に至っている。／老舎没後二〇年、「文革」終末後一〇年、最近ではようやく老舎に対する評価が、日本でも中国でも高まってきた。魯迅と並べられるほどの勢いである。魯迅を中国数千年来の士大夫の文学の伝統に立った封建宗方社会の反逆者としてのすぐれた諷刺作家だとすれば、老舎は庶民階級の屈折した諷刺文芸の伝統をふまえた中国独自の新しい近代諷刺文学の開拓者として評価されてきている。／こうなってくると、ひょっとしたら魯迅と同じように新しい偶像にされるのではないかと、逆に心配になってくるくらいである。私自身の今後の研究方向としては、老舎文学の問題点にも新しい光をあて、リアルに観察し位置づけていくことによって、人間くさい老舎像をより明確にし、私の老舎研究を一層ふくらみのあるものにしたいと考えている。(1987・5) 」

もう一冊は、近藤昌三会員の翻訳になる、老舎の流れをくむと称される「北京風味の作家で、スター記者である」劉一達の『人虫児』(中国文聯出版社、2002年第2版)であります。

◎『北京の子 人虫児』(朱鳥社、2008年7月14日、B6版341頁、1500円＋税、カバー・オビ)

◆目次2-6／原作者紹介7／劉一達:序 私と「人虫児」(抄)8-12／【日本の読者へのメッセージ】原文13／【日本の読者へのメッセージ】14／訳者まえがき15-21／図:北京城の城壁と城門22 古玩虫児……『骨董の虫』世渡りの述／瓦片虫児……『賃家業の虫』訪問記／票虫児……『ダフ屋の虫』物語／買売虫児……『商いの虫』の浮き沈み 〓 訳者あとがき324-336／清水伸:解説 近藤氏の訳述に見る見識337-340／【主要参

考文献】341

*「訳者あとがき」:「私の生まれは一九二六(大正十五)年、即ち昭和元年ですから極めつきの戦中派です。五歳の時、満州事変が起こり、小学校五年生時が日中戦争、旧制中学が日米開戦というわけです。／実は私、正統的というか、系統立ったというか、学校での中国語教育はまったく受けた経験がありません。戦中派ならではの特殊な体験だけです。／この特殊な教育は、戦中の中国語教育の歴史に記録されるべきものと考えますが、その学校(塾)の名は『北京恢弘塾』、一九三八(昭和十三)年から四五(昭和二十)年まで、存続はわずか八年でした。／私はこの『北京恢弘塾』で約一年間、中国人庶民の中に溶け込んで、一緒に生活できる訓練を受けました。これが中国と私の出会いであり、今の私の生き甲斐の源泉です。そしてなんといっても、私にとっての中国は北京です。北京の雰囲気、情緒、この匂いを知っている、これが私の自慢です。／〔☆急に話は戦後に飛びます〕／一九四八年、定年退職した私は、青春の地・北京、晋県への訪問を思い立ち、早速、中国語学習を始めました。／こうして、中国語の学習と中国訪問は私にとって最大の生き甲斐になったのです。そして北京っ子の老先生を見つけ、教材も小説になります面白くなって来ました。／同時に愛知県日中友好協会の「引揚残留孤児向け日本語教室」のほか、官、民の各種日本語学校及び教室の講師に採用され、何百人もの中国人と知り合い、今でもその中の十数人との交流を続けているのが私の自慢です。／そんな時、中国へ帰った教え子の一人から、なんと大箱入り、ズッシリ重い『老舎文集』全十六巻が送られてきたのです。これで教材の心配はまったくなくなり、「老舎」一辺倒になりました。東京の「老舎研究会」にも入れてもらって資

料をもらい、また、名古屋大学で毎週一回開かれる「老舎作品輪読会」に出席。日本語学校学生諸君に加え、毎年数回の中国訪問（主として北京、晋県）で私の中国人朋友は鰻上りに増えて行きました。／そして最高だったのは一九九九年の北京旅行。目的は『老舎記念館』の見学です。あの文化大革命で非業の死を遂げられた老舎先生、九九年はその生誕百周年に当たり、その老舎の旧居が復元されて記念館が開館したのです。この時私は、案内してくれた教え子のおかげで老舎先生のご長女、舒済女士に紹介されてお話を承り、なんと館内を案内していただき、二人並んで写してもらった写真は、私の宝物にもなっています。／こうして老舎一辺倒になりましたが、老舎没後もう四十年に近く、今度は現代的な新しい小説が読んでみたくなって、北京の友人に頼んだところ、送られてきた数冊の中に、この『人虫児』があったというわけです。／そして何回かの送本を受けましたが、その後、私は中国の出版社に直接、手紙で注文するようになり、ついに今日、劉一達先生に橋渡しをしてくださった『中国文聯出版社』の胡榮榮女士と知り合ったというわけです。／そしてその後、私の本棚は劉一達氏の作品即ち、『北京爺』〔☆上下巻、華芸出版社、2001年9月〕『胡同根儿』〔☆上下巻、中国文聯出版社、2000年4月〕『傍家儿』〔☆台海出版社、2001年1月〕などの小説のほか、北京伝統の風物、風俗、風習等の紹介書で飾られることになりました。／劉先生のメッセージにあるように、劉先生の作品はすべて老舎と同じく、北京を舞台とし、また、北京の味、北京の情緒に溢れたものばかりで、これが私を捕らえて離さないのです。」

■近藤昌三会員には、劉一達と「北京恢弘塾」のお話をぜひ研究会でお伺いしたいものです。

事務局便り

◇2007年度大会は9月8日〔土〕に、大阪産業大学梅田サテライト教室（大阪駅前第三ビル19階）で開催されました。

◇当日の発表者とテーマは次の通りです。

森本まみ子：中国ビデオ「《華夏文明》

（中央四台2004年春節特別節目）」と「農村の葬式（2004年4月1日）」の紹介

高橋由利子：1920年代における北京の教会学校をめぐる問題—

ロンドン会資料をどう読むか、老舎はなぜイギリスに行ったか—

杉本 達夫：老舎の雲南旅行

◇第17号から会報編集を担当してまいりましたが、今号でお役御免とあいなりました。毎号、締め切りとの闘ぎあいで、その結果、脱字誤字の見本市となりましたこと、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。とはいえ、なんとか会報の“灯をともし続けたい”という一心から、どうにか本号の発行に漕ぎ着けることができました。これもひとえに、会員の皆様のご支援と、採算度外視・突貫工事もナンノソノの好文出版のお骨折りによるものです。心より感謝いたします。

◇次号からは、代表委員と事務局が一新されますが、一層のご協力をお願い申し上げます。次期編集子への交代が、北京奧運陸上競技男子400メートルリレー決勝日本チームのようにまいりますように。(C)

老舎研究会会報第22号 (2008年9月15日)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学中国語中国文学（日下）研究室

老舎研究会事務局

TEL : 06-6368-1121 (代表)

